

## 父の背中

東京都 青梅市立新町中学校 3年

永山 由和 (ながやま ゆうわ)

みなさんは、自立支援施設という場所を、ご存知だろうか？私の父は、その職場で児童指導員として働いている。「自立支援て何？ どんな仕事？」そんな質問を周りから何度、繰り返し聞かれたことだろう。特殊な仕事で私も興味はあるものの、自分の中で、それは触れたくない物と勝手に決めつけ、内容は詳しく教えてもらったことは今までなかった。それは何故かという、父の仕事に対して、物心ついた頃から少し疑問を感じていたからだ。まず、家に居ない日がほとんどで、休日も、問題を起す児童がいれば、すぐに施設へ向かわなければならない。家族水いらずのドライブが施設を飛び出してしまった児童を、搜索する目的に変わってしまった日もよくあったからだ。その度に施設の印象は悪くなり、「どっちが大事なの！」と口答えをし、父を困らせてばかりいた。

なぜ、体力や精神的にも辛い職業を、わざわざ選んだのか。もっと、家族と一緒に居られる仕事だったら良かったのに…。将来、自分の未来に夢を膨らませる私にとって、父の生き方は、理解できないものだった。

けれど、人権作文を書くにあたり、先生方に父の仕事を考えてみたらと、アドバイスを頂き、改めて向き合うことに決めた。直接、父に面と向かい聞くのは少し気恥ずかしく、まずは本やネットで施設の内容を調べてみることにした。「そこは、不良行為をなし、又は、なすおそれのある児童を、受け入れる施設。心の触れ合いを基盤とした家庭的な雰囲気の中で生活をしながら、日常の知識や善悪の判断を習得させる指導を目的とした場所。」とあった。理解はできるが、イメージするのはやはり恐怖だけ……。頭の中で不良行為の四文字が残ってしかたがない。それと同時に、施設やその児童を今まで以上に、偏見の目で見てしまっている自分に気づき、このまま誤解してはいけないと思う気持ちと、父がこの仕事を選んだ理由を、もっと深く知りたいと思う気持ちが同時に浮かんだのだった。その夜、いつもの様に遅く帰宅した父に、興奮しながら、質問攻めの私に意外な答えが返ってきた。

「今、君は十四歳だよな。」父が真面目な顔で言った。なぜ、年齢を聞くのか不思議に思っていると、父は自分の過去をゆっくりと語り始めた。昔、君と同じ歳に私の両親は離婚して母親は家を出て行ってしまふ。残された自分と、まだ小学生だった妹は、今まで過ごしてきた環境が、大きく変わっていくのを感じた。暫

くすると、父親は働かなくなり、お酒に頼る毎日。借金にも手を出してしまう状態で、公共料金の支払いや、日々の食事にも支障が出てくるのは、当然の事だった。そんな苦しく辛い事情を、知り合いの大人達が、色々と手を差し伸べてくれたんだ。「何で俺だけ、こんな目に…。」と自暴自棄になり、曲がった道に進んでもおかしくなかった自分を、助けてくれた人達には、今でも、感謝してもしきれない。私が働いている施設はね…。暴力、家出。窃盗、社会的問題行動をしてしまった小学生から高校生までの児童が共に生活をしている。その中で、自らの行動を反省しつつ、自立の道を見つけ、退園しても頑張ってる姿を見せに来てくれるのが私の生き甲斐だと、最後に笑顔で答えてくれた。その夜は、なかなか寝つけなかった。父が、過去に苦労したのは聞いていたが、いつものお説教かと、耳を貸さなかった私。同じ歳に、辛い思いをしていた事実は、胸を締め付けられた。私がもし、その環境に置かれていたら、どうなっているだろう。ショックで想像もつかない。けれど、父が今の仕事を選んだ理由が、痛いほど伝わり今の何不自由ない暮らしが、どんなに幸せで、有難いことか！母が干してくれた布団の温かさで、それを感じた。

近年、少子化なのにもかかわらず、施設に入る児童数は年々、増えつつあるそう。非行の多くは、現代の生活環境が、そうさせるのもあるのだろう。だが、罪は罪。一度の過ちでも、犯してしまった人間を、簡単には受け入れられず、更生欲があっても、社会復帰が困難な場合もある。しかし、どんなに苦難な状況でも、人には父の様に、それを乗り越えられる強い能力が備わっていると思う。その力を引き出すには、偏見や差別、無関心を無くし、周囲の愛情や信頼、それにサポートが、絶対に不可欠だ。法務省も黄色い羽をモチーフに犯罪や非行を防止しつつ、立ち直りを支える社会をめざす運動を進めている。私達が理解と温かい目で、助け合える世の中を作ることが、犯罪や非行を減らす第一歩になるにちがいない。施設の児童も、そこを新しい人生のスタート地点として、頑張っている。そして子供の権利を大切に見守る、まさに人権の塊の様な現場で、父は働いているのだと改めて痛感した。

今日も仕事に向かう父の背中が、いつもより何倍も誇らしく映る。私も将来父の様に、陰ながら人を支える人になりたい。